

【書評論文】

エージェンシーをめぐるパラドックス
—イバン人都市移住者の事例から—

SODA, Ryoji, *People on the Move: Rural-Urban Interactions in Sarawak*
(Kyoto University Press, 2007)

大室 元

I はじめに

移動することはサラワク州におけるイバン (Iban) 人¹の1つの大きな特徴である。現在のインドネシア領からマレーシア領への渡来をめぐる歴史の点においても、適地を求めた移動を要する焼畑農業をめぐる生業の点においても、ブジャライ (*bejalai*)²といわれる慣習の点においても、彼ら／彼女らは移動する民族といえる (祖田, 2008a)。J.D. フリーマンの先駆的な民族誌 (Freeman, 1955; 1970) をはじめ、イバン人研究 (Iban studies) ではもともと人類学的研究が豊富に蓄積されてきたが、こうした様々な目的で古くから行われてきたイバン人社会における移動の近年の形態としての向都移住に地理学的にフォーカスしたのが *People on the Move: Rural-Urban Interactions in Sarawak* (以下、「本書」と記す) であった。向都移住するイバン人の生活の実態は、2010年代以後の様々な研究 (例えば、Ichikawa, 2019; Ngidang, 2012; Sim, 2011) において継続して議論され、イバン人研究の重要な論点の1つになっている。

こうした向都移住に対する関心の拡大は、もちろん研究の裾野を広げる上では意義ある進展だが、ムスリム＝プミプトラを頂点とするサラワク州の政治的に不平等な権力構造といったマクロなレベルの構造の作用を十分に考慮していないことは未解決の問題点だ。本書をはじめ、向都移住をめぐる近年の研究はイバン人の適応能力を過大評価しており、構造の作用は相対的に後景化している。構造の軽視はイバン人の表面的な主体性の過剰な強調に結び付く。

イバン人都市移住者研究における中核的研究書といえる本書を中心に、イバン人研究を含むサラワク地域研究の一部の文献を批判的に再検討することによって、本稿では主体要

¹ 人口センサス (2010年度) によれば、サラワク州の人口の合計は約247万人で、イバン人はこれの30.3%に当たる約74万8千人を占める同州の最大の民族になっている (Department of Statistics Malaysia, 2010)。

² ブジャライとはイバン人の若年の男性が財産と名誉を手に入れるため村を離れ、旅に出る独特な慣習で、1960年代以後、賃金労働に村の外で従事するのとほぼ同義になっている (Langub, 2011; Soda and Seman, 2011)。

因と構造要因の両方の視点を含めた新しいリサーチ・クエスチョンを導き出すことを目的とする。これはイバン人都市移住者の生活と戦略のありかたを構造との関係から問い直す政治学的な問題の提起である。イバン人研究において、本書が人類学と地理学の対話を促したとするなら、本稿は人類学と政治学の対話を促すものである。

II 本書の内容

サラワク州では1980年代以後、「地方都市 (local town) (Soda, 2000)」が急速に発展し、伝統的な高床式のロングハウス (longhouse) を内陸の農村に建てて暮らすイバン人が世帯単位で向都移住するようになった (Ichikawa, 2019; Soda, 2000)。本書の内容は、こうしたイバン人社会における向都移住の拡大の実態³を主に論じたものだが、京都大学大学院の修士課程在籍中の95年に同州を初めて訪れた筆者にとって、当初の関心は近代化にともなったイバン人の農村社会の生活変化にあった (本書: ix)。調査の範囲を町に広げたきっかけは、ある時は農村開発をめぐる話し合いのために、ある時は選挙における投票のために、町から帰ってくる世帯の成員の存在に気付いたことだった (本書: ix-xi)。農村における調査だけではイバン人の生活の全貌を明らかにすることは難しいのではないか (本書: x)。ここからイバン人都市移住者に対する問題関心は生み出されたのである。

本書の構成は「状況設定 (Setting the Scene)」と題された第I部 (第1~2章)、「イバン人の新しいエスノグラフィー (The New Ethnography of the Iban)」と題された第II部 (第3~7章)、「研究動向ならびに結語 (Research Trends and Concluding Remarks)」と題された第III部 (第8~9章) という3部9章である。移動者個人に対する視点⁴を重視し、「生活戦略 (living strategy) (本書: 5)」にもとづいたイバン人の「生活空間の拡大の過程 (the process of expansion of their living space) (本書: 204-205)」を論じている点が全体の特徴で、農村と都市の両方の空間にまたがった生活の実態が描き出されている。では、各章の内容に目を向けよう。

第1章では、1980年代以後における向都移住は男性中心の単身移住のブジャライとしては捉えきれないため世帯を単位に考えるべきだと問題提起するなど、問題の所在を詳しく論じている。

第2章では、調査地域になっているシブ省 (Sibu Division) のカノウィット県 (Kanowit District) とシブ県 (Sibu District) の地理と歴史について論じているほか、「多層的な周縁性に構造的に埋め込まれた (structurally embedded in a multi-layered marginality) (本書: 24)」イバン人の脆弱な立場について明らかにされている。この「多層的な周縁性」は本書の内容を考える上での重要な前提だ。政治的な力はムスリム＝プミプトラが握っている

³ もっとも、向都移住は既に80年代以前から行われており、現象自体はおおよそ30年前から何冊かの書籍 (例えば、Kedit, 1993; Sutlive, 1992) になるほどに知られた話であった。

⁴ こうした分析視角のことを筆者は別稿で「移動者中心アプローチ ([m]over-oriented approach) (祖田, 2008a; Soda, 2007b)」と名付けている。

一方、経済的な力は華人が握っているため、イバン人は力を持っていないのである（本書: 23-24）。第Ⅱ部の多種多様な「生活戦略」はこのような不利な構造に対応するための方法といえよう。

第3章では、まず、ビレック (*bilek*) とルアイ (*ruai*) の2つの空間により構成されるイバン人のロングハウスのコミュニティについて論じている。ビレックとは1つひとつの世帯のための私的な閉ざされた空間（部屋）であり、ルアイとは全ての成員のための公的な開かれた空間（廊下）である。こうしたロングハウスのコミュニティは「小さな村落 (a small-scale village)」（本書: 50）」の様相を呈している。また、これをふまえ、カノウィット県におけるランタウ・ケミディング村 (Rantau Kemiding Village) のロングハウスのコミュニティについて論じている。ここでは、ロングハウス A (1936 年建設) とロングハウス B (85 年建設) の2か所のロングハウスからなるランタウ・ケミディング村の形成の過程について、宗教、生業、リーダーシップといった点から論じられているが、次章との関連では、50 年代以後の生業の変化に目を向けるべきであろう。陸稲耕作から水稲耕作への移り変わりのほかに、新たに行われるようになったゴム栽培によって収入が安定し、定住につながったのである（本書: 59-62）。

第4章では、イバン人がゴムの価格の下落によって町に出るようになった点について論じられているが、そもそもイバン人社会における向都移住には2つのトレンドがあるという。1980 年代までは木材産業ないしは石油産業における雇用機会を得るための男性中心の短期的な滞在が行われ、両親への送金を目的とした都市から農村への富の移動が焦点になっていた一方、80 年代からはクルジャ (*kerja*) といわれる多様かつ安定した雇用機会を得るための世帯単位の長期的な滞在が行われ、子女への教育を目的とした都市における富の蓄積が焦点になっている（本書: 89-92）。前者はいわば出稼ぎで、ブジャライの慣習の延長線上に位置づけられるが、後者はこのようなブジャライのための循環型移住 (circulatory migration) というよりはクルジャのための世帯型移住 (family migration) であった（本書: 91）。「地方都市」において、よりよい職業選択ができるようになった男性が妻と子を同伴し、より安定した町住みを定着させたことが80 年代以後における向都移住の質的な変化といえる。また後半では、こうした若年の世帯の向都移住がロングハウスのコミュニティの「空洞化 ('structural degradation')」（本書: 103）」につながっているとし、高齢化にともなった農村の変化を主に論じている。ランタウ・ケミディング村では、丘陵における陸稲耕作から湿地における水稲耕作への移行がさらに進んでおり、休閑期間が短くなったり耕作面積が狭くなったりしている（本書: 92-93）。ビレックもルアイも機能を低下させつつある（本書: 102）。とはいえ、ロングハウスのコミュニティは職に就けなかった若者が帰る場でもあり、リタイアしたイバン人が老後の生活を送る場でもある。すなわち「保険 ('insurance')」（本書: 106）」としては機能しているのである。

第5章では、ランタウ・ケミディング村からシブ県へと向都移住したイバン人の様々な形態の「生活戦略」について、以下の諸点を主に論じている。第1に、スクオッター化しがちだったイバン人がサラワク州政府主導の再定住計画の「一時占拠許可 (Temporary

Occupation Licenses, TOLs)」を獲得し、住む家を持つことができたこと（本書: 112-116、121-122）。第2に、再定住化をめぐる行政との交渉では、マレー人とメラナウ人を中心とするムスリム＝ブミプトラ、イバン人を中心とする非ムスリム＝ブミプトラ、華人を中心とする非ブミプトラの相互の協調にもとづいた「委員会 (*Jawatankuasa*)」ができたこと（本書: 122-124）。第3に、ブミプトラではあるがムスリムでないためブミプトラ優遇措置における公共部門の雇用上の優遇度が低いイバン人であるが、ごみ収集、雑草処理、道路補修、運転代行、オフィス清掃といった下層の職業が得られること（本書: 120-121、124-128）。第4に、多くのイバン人が将来の帰村を考えており、両親のために送金したりガワイ (*gawai*) といった冠婚葬祭のために帰省したりすることによってロングハウスにおけるコミュニティとの紐帯の維持を図っているということである（本書: 131-138）。

第6章では、ロングハウス補修事業といった農村開発のための予算が故郷の農村に配分されるようにするため、向都移住したイバン人が有権者登録を故郷の農村で行うことによって政権党の候補者に票を投じる「リターン投票 (*'return voting'*)」（本書: 151）」をしていると論じている。農村開発は本来であれば住民の申請で実施されるが、申請の採否は政治家個人への働きかけによって決まるとされる（本書: 147-149）。このため、まず政権党の候補者を当選させることが重要になってくるのである。「リターン投票」は故郷の農村の基本的な住環境を改善しようとする戦略のほかならず、ロングハウスにおけるコミュニティとの紐帯の維持と同様、帰村志向にもとづいた行動として解釈できる。

第7章では、慣習的土地占有 (*usufruct*) が近代的土地所有 (*ownership*) に移りつつあるため難しくなってきてはいるが、イバン人が農村と都市の両方の空間に対する帰属をあいまいに維持することで土地やビレックの相続問題の解決を先延ばししていると論じている。町住みをすることは相続の問題を考える時間の猶予を与えているのである（本書: 176-179）。向都移住したイバン人が現在の町での暮らしばかりでなく将来的な帰村後の生活をも重視しているということがこの点にも表れている。

第8章では文献解題をしているが、まず、本書の内容を農村の内外的非農業職の拡大の過程にともなった「脱農業化 (*deagrarianization*) (Bryceson, 1996)」といった先行研究の主要な視点のなかに位置づけなおしている。また、農村と都市を分けて考える先行研究には2つの空間をうまく統合する視点がないことが問題だとして、本書が農村と都市の両方を生活空間にするイバン人の姿を描いたことが強調されている。彼ら／彼女らにとって、農村と都市は二項対立をこえた「1つの単位 (*a unit*)」（本書: 139）」になっているのである。

第9章では、特定の場所に居を構えているということにもとづくセデンタリズム (*sedentarism*) を明確に批判しながら、農村と都市の両方の空間における「相互の、頻繁で複雑な移動 (*reciprocal, frequent and complicated moves*)」（本書: 208）」によって特徴づけうるイバン人とは「様々な次元の構造の中に『風穴』を開ける (*boring a 'wind hole' in the structures at various levels*)」（本書: 211）」ことができる存在だと結論する。

Ⅲ 本書の意義

本書の意義は、第1に、「多層的な周縁性」に埋め込まれたイバン人が様々な形態の「生活戦略」によって生活の安定化と充実化を実現しているということがフィールドワークから明らかにされた点にあるだろう。本書において、「生活戦略」を題名に冠している章は第5章のみだが、「生活戦略」は本書の全体にまたがったテーマになっている。開発誘致のための「リターン投票」も、相続問題をめぐる意思決定先延ばしも、「生活戦略」の広義の範疇に含められるだろう。農村の住民が非農業的な職に就くようになるという「職業上の多様性 (occupational multiplicity) (Rigg, 1998; 2006)」が「脱農業化」の主要な側面の1つとされており、向都移住したイバン人が公共部門の下層の職業にありついている点がこれに重なる。しかしながら、「生活戦略」はこれに必ずしも留まらない。「生活戦略」とは「イバン人の生活の全ての側面に関わる (concern all aspects of their life) (本書: 14)」のである。彼ら／彼女らは、農村では将来の帰村に向けた働きかけをし、都市では行政の様々なサービスの恵みを受けることによって基本的な衣食住を確立しながら生活している。「生活戦略」はこのような農村と都市の両方の空間にまたがったイバン人の柔軟で堅実な生き方について考える有力な視点を与えている。

第2に、「移動するエージェント (agents on the move) (本書: 211)」とされるイバン人にとって、農村と都市は「1つの単位」のような位置づけであるという問題提起をしたことに注目すべきだ。彼ら／彼女らは「個人のレベルで都市／農村の二項対立図式を乗り越え、両者の統合を内面化している (祖田, 2008a: 13)」のである。これは送出地としての農村と受入地としての都市の空間的な二分法にもとづいた従来の研究の分析視角を明確に批判し、移動者個々人に光を当てようとする本書ならではの知見であり、同様の視点は近年の研究 (例えば、移動者個々人のライフコースの展開に注目した Rigg, Nguyen, and Luong, 2014) にもみられる。

第3に、「地理学的視点の導入によって、これまでのイバン研究あるいは東南アジアの移動民研究への貢献が可能になる (祖田, 2008a: 3)」ことを問題提起した本書には1つの大きな意義があるだろう。イバン人研究は4冊の百科事典 (Sutlive and Sutlive, 2001) になるほどの厚みを持っている。この百科事典には、社会構造、焼畑農業、首狩りの慣習、宗教、儀礼、口承文学といったイバン人研究の主要な論点をリストアップした重要な文献 (Appell, 2001) が収められているが、イバン人研究の外側の世界への広がりがあまりない。本書の内容は、こうしたイバン人研究を外に開かれたものにし、移動研究 (migration studies) といった研究領域との活発な交流を繰り広げてゆくきっかけになるだろう。

Ⅳ 論点

紐帯維持や開発誘致のための農村での働きかけにせよ、住宅や雇用のための都市での働きかけにせよ、「農村と都市の生活を統合する (integrate rural and urban lives) (Soda, 2007b:

47)」生き方にせよ、本書の内容は「多層的な周縁性」に適応しながら生活しているイバン人の姿を描いている。こうした不利な構造を生き抜くコミュニティに対するポジティブな視点は重要だ。だが本書では、イバン人がうまく立ち回る姿ばかりが描かれており、その戦略性、適応性、流動性が過剰に強調されているのではないかと思えるところが少なくない。これについて、2点指摘する。

第1に、「移動するエージェント」としてのイバン人の生き方の今後の展望は必ずしも論じられていない。

農村への視点としては、サラワク州における農村の景観が開発区域と保護区域に二分されつつあり、先住民族の生活空間が圧迫されていると指摘している近年の研究（例えば、金沢, 2012; 祖田, 2008b）に注目すべきだ。とりわけ、慣習的な占有権を1958年土地法（Land Code）によって認められている先住慣習地（native customary land, NCR）がオイルパームのプランテーションの拡大によって脅かされるなど、現地住民による土地利用と開発主体（サラワク州政府と開発業者）による土地利用が深刻な軋轢を生み出しているのが同州の現状だ（Cramb and Sujang, 2011; Varkkey, Tyson, and Choiruzzad, 2018）。農村社会の生活空間は巨大な開発のプレッシャーにさらされているのである。農村における安定した居住基盤がこのような不安定な状況下で成り立つのかどうかは問われるべき点といえる。

都市への視点としては、向都移住したイバン人にとって、生活の実態は農村と都市の「二重居住（dual residency）（Ngidang, 2012）」というよりは都市における定住にむしろ移り変わってゆくのではないか。ブミプトラ優遇措置によって生み出された非ムスリム＝ブミプトラのためのブルーカラーの安定的な雇用枠は、焼畑農業からイバン人を引き離し、「地方都市」に移り住むよう促しているようにも思える。農村における移動耕作から都市における賃金労働への生業の転換は、サラワク州政府にとって、イバン人の生活の実態を「読みやすい（legible）（Scott, 1998）」ものに変えるのである。ここには新しい形のセデンタリズムをみいだせるのではないか。

「デサコタ（*desakota*）（McGee, 1991）」論をはじめ、東南アジアの農村と都市の「相互浸透（interpenetration）（Rigg, 1998）」は既に論じられている点であるため、生活空間をこれら2つの空間の両方に広げるということはイメージしやすい。だが「移動するエージェント」とされるイバン人の生き方がこれからも続くのかどうかは中長期的な視点で議論すべきだ。このことは彼ら／彼女らを移動する民族と捉える認識の正しさをめぐる非常に重要なリサーチ・クエスチョンになりうる。

第2に、イバン人によるブミプトラ優遇措置の恩恵の享受を「生活戦略」に含めることについては議論の余地が残されているだろう。彼ら／彼女らは政府によって懐柔されているだけであるようにも少なからず思ってしまうからだ。イバン人は「様々な次元の構造の中に『風穴』を開ける」というよりは「ムスリム・ファースト・モデル（a 'Muslims-first' model）（Chin, 2014: 90）」ともいうべきサラワク州のマクロなレベルの権力構造に縛り付けられているだけではないのか。ブミプトラ優遇措置の最大の恩恵を受けるのはムスリム＝ブミプトラにほかならず、ムスリムではないイバン人の優遇の程度は低いいため、「二級

のブミプトラ（‘second-class’ Bumiputera）（Chin, 2019: 213）」のステータスを受け入れざるをえない。彼ら／彼女らにとって、ブミプトラ優遇措置の様々な恩恵を受けるということは脆弱な立場を自ら認め、結果的にこれを再生産してしまうという一種の矛盾を生み出すのである。安定した町住みをイバン人自身の戦略的な選択の結果とみなすのは早計な判断だ。

「移動するエージェント」としての生き方にしても、ブミプトラ優遇措置の恩恵の享受にしても、問題の本質は不利な構造に埋め込まれたイバン人のエージェンシーを過剰に強調していることにあるだろう。「構造化理論（theory of structuration）（Giddens, 1984）」の基本的な考え方では、エージェンシーと構造の関係性は再帰的で、エージェンシーとは「構造を創出する主体であると同時に構造に捕らわれているただの代理人（数土, 1997: 227）」でもある。だが本書では、視点は「多層的な周縁性」を「生活戦略」によって乗り越えている主体としてのイバン人のエージェンシーに傾斜し、「構造に捕らわれているただの代理人」といういわば客体としてのイバン人のエージェンシーは影を潜めているのである。こうした視点の偏重は、一方において、2010年代以後のいくつかのイバン人都市移住者研究（例えば、郊外地域における居住基盤の形成の過程について論じた Ichikawa, 2019; Ngidang, 2012）にもみられる。他方において、同様の問題は移動者の主観性（migrant subjectivity）を描く他の移動研究（例えば、人口移動をめぐるガバナンスに対する抵抗としての移動について論じた Killias, 2010; Thao and Agergaard, 2012）、ひいてはサラワク地域研究の一部の文献（例えば、先住民族の抵抗運動を詳しく論じた Aiken and Leigh, 2011; Osman, 2000）にもみられる。

では、構造的な脆弱性に適応しながら生活しているイバン人のエージェンシーを過剰に強調し、焦点化してしまうことの問題点はどこにあるのか。最大の問題は、イバン人の表面的な主体性に光を当てすぎるあまり、「生活戦略」の内在的な反作用を覆い隠してしまうことだ。様々な形態の「生活戦略」は、イバン人自身の日常的な自助努力によって成り立っているというよりは、TOLによる住宅供給、ブミプトラ優遇措置による雇用創出、「リターン投票」による開発誘致といった公的な支援のチャンネルに相当な部分を依存することで維持されている。

以上の知見は「エージェンシーをめぐるパラドックス」ともいうべき1つの大きな仮説の構築に結び付く。すなわち、イバン人は現行体制の構造の内部に組み込まれてきたのではないか、ひいては、不利な構造を生きる上でのイバン人のエージェンシーはこのような不利な構造を生み出す現行体制の長期持続を逆に促してきたのではないか、というものだ。イバン人が現行体制の長期持続を促進する行動には、一方では制度内のより直接的な政治行動としての投票行動があり、他方では制度外のより間接的な政治行動としての反体制的な運動の回避がある。

まず、2つの理由から、現行体制の長期持続は「リターン投票」を含む農村におけるイバン人の投票によって促進されてきたと推論できるだろう。第1に、1991年州議会選挙後から開票作業を各村落で即時行っているサラワク州では、ロングハウスごとの投票の内

訳を表に出されてしまう(祖田, 2008a; Soda, 2003; 本書)。このため、農村開発の穏便な誘致のために、農村部選挙区では政権党の候補者に票を投じなければならないプレッシャーが強く働く。第2に、小選挙区制下において、ゲリマンダリング(gerrymandering)といった「農村重視(rural weighing)(Case, 2001: 48)」の不正な選挙区の操作が一票の格差を生み出している。このため、農村における投票の方が、そもそも政権党の候補者に議席を配分する上での相対的な影響力が大きいのである。農村におけるイバン人の投票は、不徹底な秘密投票を背景としてより積極的に政権党の候補者に投じられると考えられるし、不均衡な選挙区割りを背景としてより効果的に議席獲得に結び付くのである。イバン人がどれくらい開発の文脈で利益誘導され、強権的体制下における政権党の安定的な議席獲得を下から支える票田の役割を担ってきたかは、現行体制の長期持続を考えるポイントになるだろう。

また、イバン人は「あからさまな抵抗の態度(an attitude of open resistance)(本書: 208)」を示すことを避けてきたが、現状維持に対するイバン人の政治的な志向性はここにもみいだせる。退職後の農村における生活基盤を整える上でも、現時点の都市における生活基盤を整える上でも、イバン人は現行体制の公的支援に大きく頼らざるをえない。このため、土地紛争といった散発的で局地的な争いは生じうるとしても、現行体制に対する直接の抵抗はイバン人の共通の利益にはなりにくいだろう。

以上の仮説は、イバン人のエージェンシーの客体としての側面、すなわちパトロン・クライアント関係の中に深く組み込まれたイバン人の姿を描く。彼ら／彼女らは、「生活戦略」を公的な支援のチャンネルによって成り立たせてもらうかわり、現行体制の長期持続に制度の内外からコミットしている。これは限定的な選択肢の中で生活の質を改善するための、表面的には戦略的だが、イバン人にとっては苦渋の選択の結果である。換言するならば、不利な構造を生み出す源泉であるはずの現行体制の長期持続に寄与しないかぎり、イバン人は不利な構造を生き抜けないのである。サラワク州における現行体制の長期持続は、一方では森林資源をめぐるエリートのレベルの利権構造(例えば、森下, 2013; Dauvergne, 1997)という上からのメカニズムによって実現されつつ、他方ではクライアント(client)としてのイバン人からパトロン(patron)としての現行体制への継続的な支持の表明という下からのメカニズムによっても実現されている。イバン人研究の今後の課題、とりわけ政治学的な近接課題の1つは、こうした体制持続をめぐるテーマにあるといえるだろう。

今後の研究は、エージェンシーの表面的な主体性を切り取ることなく、構造との関係から、その両義的な解釈の余地を常に考えなければならない。サラワク地域研究において、現地主義にもとづいた既存の研究はエージェンシーをとりまいてる構造の存在を相対的に後景化し、現地社会における様々な民族のエージェンシーをミクロなレベルで捉えることばかりを重んじてきたのではないか。イバン人都市移住者の生活と戦略をめぐるディスカッションはこのようなサラワク地域研究のありかたを問い直すきっかけになるだろう。

V おわりに

本書の内容は、「多層的な周縁性」に適応しながら生活するため、「生活戦略」にもとづいた柔軟で堅実な生き方をしているイバン人の姿を描いたものである。とりわけ、町住みをするための最低限度の生活基盤を公的な支援で得ることができる点はイバン人の向都移住の最大の特徴で、こうしたエスニック・ポリティクスにいかに向き合うかは避けられない問いだ。いうまでもないが、これは半島にも共通するテーマであり、「ある種の『タコツボ』的状況に安住してきた（祖田, 2017: 15）」サラワク研究をマレーシア研究に関連づけるための契機になるだろう。イバン人は「多層的な周縁性」を乗り越えてはいないのではないか。それとも、都市のカンポン（urban *kampung*）といった政府の公式のナラティヴとは異なる営みはあるのか。

いずれにせよ、イバン人社会における向都移住の現在の動態をアップデートした本書の意義は極めて大きい。多少の批判は考えられるが、本書の意義を失わせるものではない。イバン人都市移住者研究のまとまったケース・スタディーといえる本書はこれからも参照されつづけるにちがいない。

〈参考文献〉

- 金沢謙太郎（2012）『熱帯雨林のポリティカル・エコロジー—先住民・資源・グローバリゼーション』昭和堂。
- 数土直紀（1997）「ギデンズの構造化理論」井上俊ほか編『岩波講座 現代社会学 別巻 現代社会学の理論と方法』岩波書店、pp. 217-229。
- 祖田亮次（2008a）「東南アジアにおける農村—都市間移動再考のための視角—サラワク・イバンの事例から—」『E-journal GEO』第3巻第1号、pp. 1-17。
- （2008b）「第5章 サラワクにおけるプランテーションの拡大」秋道智彌、市川昌広編『東南アジアの森に何が起きているか—熱帯雨林とモンスーン林からの報告』人文書院、pp. 223-251。
- （2017）「マレーシアのなかのサラワク、マレーシア研究のなかのサラワク研究」『マレーシア研究』第6号、pp. 3-20。
- 森下明子（2013）「第6章 サラワクの森林開発をめぐる利権構造」市川昌広、祖田亮次、内藤大輔編『ボルネオのくまの環境学—変貌する熱帯林と先住民の知』昭和堂、pp. 187-220。
- Aiken, S Robert and Leigh, Colin H (2011) “In the Way of Development: Indigenous Land-Rights Issues in Malaysia,” *Geographical Review*, 101(4), pp. 471-496.
- Appell, George N (2001) “Iban Studies: Their Contributions to Social Theory and the Ethnography of Other Borneo Societies,” in Sutlive, Vinson H and Sutlive, Joanne (eds) *The Encyclopedia of Iban Studies: Iban History, Society and Culture (Volume III)*,

- Tun Jugah Foundation.
- Bryceson, Deborah Fahy (1996) "Deagrarianization and Rural Employment in sub-Saharan Africa: A Sectoral Perspective," *World Development*, 24(1), pp. 97-111.
- Case, William (2001) "Malaysia's Resilient Pseudodemocracy," *Journal of Democracy*, 12(1), pp. 43-57.
- Chin, James (2014) "Exporting the BN/UMNO model: Politics in Sabah and Sarawak," in Weiss, Meredith L (eds) *Routledge Handbook of Contemporary Malaysia*, Routledge.
- (2019) "Malay Muslim First': The Politics of Bumiputeraism in East Malaysia," in Lemièrre, Sophie (eds) *Malaysian Politics and People*, Amsterdam University Press.
- Cramb, Rob and Sujang, Patrick S (2011) "'Shifting ground': Renegotiating land rights and rural livelihoods in Sarawak, Malaysia," *Asia Pacific Viewpoint*, 52(2), pp. 136-147.
- Dauvergne, Peter (1997) *Shadows in the Forest: Japan and the Politics of Timber in Southeast Asia*, The MIT Press.
- Department of Statistics Malaysia (2010) *Population and Housing Census of Malaysia: General Report of Malaysia*, Department of Statistics Malaysia.
- Freeman, John Derek (1955) *Iban Agriculture: A Report on the Shifting Cultivation of Hill Rice by the Iban of Sarawak*, Her Majesty's Stationery Office.
- (1970) *Report on the Iban*, Athlone Press and Humanities Press.
- Giddens, Anthony (1984) *The Constitution of Society: Outline of the Theory of Structuration*, University of California Press.
- Ichikawa, Masahiro (2019) "Immigration and adaptation of the Iban from rural to urban outskirts in Sarawak, Malaysia," *Tropics*, 28(2), pp. 39-48.
- Kedit, Peter Mulok (1993) *Iban Bejalai*, Ampang Press.
- Killias, Olivia (2010) "'Illegal' Migration as Resistance: Legality, Morality and Coercion in Indonesian Domestic Worker Migration to Malaysia," *Asian Journal of Social Science*, 38(6), pp. 897-914.
- Langub, Jayl (2011) "THE IBAN OF MEROTAI: BEJALAI NARRATIVES," *Borneo Research Bulletin*, 42, pp. 260-275.
- McGee, Terry G (1991) "The emergence of *desakota* regions in Asia: expanding a hypothesis," in McGee, Terry G., Ginsburg, Norton., and Koppel, Bruce (eds) *The Extended Metropolis: Settlement Transition in Asia*, University of Hawaii Press.
- Ngidang, Dimbab (2012) "FROM FRONTIER REGION TO GENTURUNG PENDIAU: DUAL RESIDENCY AND THE MAKING OF NEW IBAN SETTLEMENTS IN PERI-URBAN KAPIT," *Borneo Research Bulletin*, 43, pp. 162-186.
- Osman, Sabihah (2000) "Globalization and democratization: the response of the indigenous peoples of Sarawak," *Third World Quarterly*, 21(6), pp. 977-988.
- Rigg, Jonathan (1998) "Rural-urban interactions, agriculture and wealth: a southeast Asian

- perspective,” *Progress in Human Geography*, 22(4), pp. 497-522.
- (2006) “Land, Farming, Livelihoods, and Poverty: Rethinking the Links in the Rural South,” *World Development*, 34(1), pp. 180-202.
- Rigg, Jonathan., Nguyen, Tuan Anh., and Luong, Thi Thu Huong (2014) “The Texture of Livelihoods: Migration and Making a Living in Hanoi,” *Journal of Development Studies*, 50(3), pp. 368-382.
- Scott, James C (1998) *SEEING LIKE A STATE: How Certain Schemes to Improve the Human Condition Have Failed*, Yale University Press.
- Sim, Hew Cheng (2011) “COPING WITH CHANGE: Rural Transformation and Women in Contemporary Sarawak, Malaysia,” *Critical Asian Studies*, 43(4), pp. 595-616.
- Soda, Ryoji (2000) “Living Strategies of the Urban Poor in a Local Town in Sarawak, Malaysia: Population Mobility of the Iban between Urban and Rural Areas,” *Geographical Review of Japan*, 73(2), pp. 139-164.
- (2003) “Development Policy and Human Mobility in a Developing Country: Voting Strategy of the Iban in Sarawak, Malaysia,” *Southeast Asian Studies*, 40(4), pp. 459-483.
- (2007a) *People on the Move: Rural-Urban Interactions in Sarawak*, Kyoto University Press.
- (2007b) “Mover-oriented approach to understand rural-urban interaction: a case from Sarawak, Malaysia,” *Journal of the Graduate School of Letters*, 2, pp. 47-58.
- Soda, Ryoji and Seman, Logie (2011) “Life Histories of Migrants: Bejalai Experiences of the Iban in Sabah, Malaysia,” *Geographical Studies*, 86(1), pp. 132-152.
- Sutlive, Vinson H (1992) *The Iban of Sarawak: Chronicle of a Vanishing World*, Waveland Press.
- Sutlive, Vinson H and Sutlive, Joanne (eds) (2001) *The Encyclopedia of Iban Studies: Iban History, Society and Culture (Volume I-IV)*, Tun Jugah Foundation.
- Thao, Vu Thi and Agergaard, Jytte (2012) “‘White cranes fly over black cranes’: The *longue durée* of rural-urban migration in Vietnam,” *Geoforum*, 43(6), pp. 1088-1098.
- Varkkey, Helena., Tyson, Adam., and Choiruzzad, Shofwan Al Banna (2018) “Palm oil intensification and expansion in Indonesia and Malaysia: Environmental and socio-political factors influencing policy,” *Forest Policy and Economics*, 92, pp. 148-159.

(おおむろ・はじめ 東京大学大学院博士課程)